

## 【特集】当事者の声を聴くことから研究へ

浜渦 辰二・榊原 哲也

本特集は、2017年11月25日に東京大学本郷キャンパス法文2号館一番大教室で開催された日本現象学・社会科学会第34回大会シンポジウム「当事者の声を聴くことから研究へ」においてご提題いただいた西村ユミ氏（首都大学東京）と白井千晶氏（静岡大学）、ならびに特定質問者として両提題に対して質問を行うとともに自らの研究についてもご発表くださった稲原美苗氏（神戸大学）に、ご提題あるいはご発表をもとにご寄稿いただいた論文を編んだものである。

シンポジウムは、司会を担当した浜渦辰二（大阪大学）と榊原哲也（東京大学）によって企画された。学会ホームページに掲載されたシンポジウムの「企画趣旨」は以下のとおりである。

### 〈企画趣旨〉

現象学と社会学とが交差するところに、いわゆる「質的研究」がある。社会学において、社会現象を調査する際の質的研究の方法として、グラウンデッドセオリーやエスノメソドロジー、会話分析などが、また生活史を記述する手法としてライフヒストリー、ライフストーリーなどが開発されてきたことは周知のことであろうが、現象学もまた、種々の先入見を取り払いながら当事者の生きられた経験をありのままに捉えようとする「事象そのものへ！」の精神のもとに、「質的研究」の現象学的研究法として位置づけられてきたという経緯がある。

しかし、そもそも「質的研究」を行うとはどういうことなのか？そこではいかなる事態が生起しているのだろうか。質的研究においては、定量的な研究では決して掬い上げることができないような、当事者（たち）の経験世界とそこでの質的な経験を理解することが目指されると言ってもよいと思われるが、そうした研究の出発点の少なくとも一つは、当事者（たち）の経験世界に身を置き、当事者（たち）の声を聴くことであろう。研究者はどのようにして当事者（たち）の経験世界に身を置き、彼らの声を聴くのだろうか。またそこからどのように研究へとつなげていくのだろうか。さらにそうした研究によって、当事者（たち）の経験世界やそこでの経験はどのように明らかになっていくのだろうか。質的研究にはさまざまなアプローチの仕方、研究方法が存在するが、探求される事象と方法とは独立なのだろうか。それとも、現象学という哲学が元来、探求する「事象そのもののほうから」記述と方法を立ち上げてきたように、探求されるべき事象そのもののほうから、研究への道筋が定まってくるのだろうか。

本シンポジウム「当事者の声を聴くことから研究へ」では、看護学および社会学

の分野で当事者（たち）の語りを聴くことをベースにして、そこから研究を展開してきた西村ユミ氏と白井千晶氏を提題者に迎えて、具体例を出していただきながら、これらのことを改めてじっくり考えてみたい。語りを聴くこととフィールドワークとの違いや、語りを聴くこととアンケート調査との違いについても、触れていただければと考えている。また、ジェンダー研究の実践として、障がいのある子供の母親に対して哲学カフェを行い、その語りについて質的研究を行っている稲原美苗氏を特定質問者に迎え、さらに議論を深めてみたい。

当日は、提題の内容を考慮して、白井千晶氏「「打ち明ける」：リプロダクションの構築主義的ライフストーリー・インタビュー」、西村ユミ氏「遺伝性疾患患者の語りと時間経験の構造」の順に提題が行われ、特定質問者・稲原美苗氏の発表の後、フロアを交えた活発な議論が行われた。極めて有意義なシンポジウムであったと思う。

提題者の西村ユミ、白井千晶の両氏、特定質問者の稲原美苗氏には、シンポジウム企画者としてあらためて感謝するとともに、貴重なご論考をお寄せくださったことに、心からお礼申し上げたい。

(はまうずしんじ・大阪大学)

(さかきばらてつや・東京大学)